

平成 28 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第 3 年次）（概要）

1 研究開発課題				
5 年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～				
2 研究の概要				
<p>本研究では、看護専門職者に求められる力は、新たな医療技術の進歩や社会の変化に柔軟に対応するために必要な「生涯学び続ける力」であるとの仮説を立て、様々な取組を行っている。「生涯学び続ける力」は、その要素である広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」における各取組で身につけた力を統合し、新たな課題を発見し自ら解決する力であると捉えている。本研究の目的は、「生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力」を身につけ、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することである。そのために、これまでの教育活動を見直すとともに、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことに重点を置いてきた。</p> <p>今年度は、3 年目としてこれまでの実績をもとに、シラバスの中に位置づけた各取組の定着とともにこれまでの教育活動を深化させることを目指した。また、これまで各取組における評価を鈴木敏恵氏による「プロジェクト学習で身につく力」30 項目を参考にして「育てたい力」を設定し行ってきたが、生涯学び続ける専門職者を育てる取組を相対的に評価する指標として、新たに「SPHで身につく力～実習ループリック～」を作成した。</p>				
3 平成 28 年度実施規模				
<p>全校生徒を対象に実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 26 年度入学生(高校 3 年生) をターゲット学年とし、SPH活動全体の成果の評価の対象とする。 後続の学年(高校 1、2 年)は、継続して活動を実施した。 先行の学年(専攻科 1、2 年)は、トライアル学年として可能な限り実施し、ターゲット学年での実施の準備を進めている。 				
4 研究内容				
○研究計画				
	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力
3 年次 (高 3)	・夏休み地域活動体験	・ICTを活用した授業 ・専門家による特別授業 (フィジカルアセスメント、放射線看護、がん看護、災害看護) ・学年に応じた技術の統合実践	・実験の要素を含んだ学習体験 ・大学との連携講座(日本薬科大学) ・看護研究方法	・キャリアポートフォリオの作成(夢をかなえようプロジェクト)
4 年次 (専 1)	・夏休み地域活動体験 ・ライフステージからみた生命倫理に関する授業 ・特別講座(人間関係論、他職種の専門家による講座)	・ICTを活用した授業 ・学年に応じた技術の統合実践	・看護研究方法 ・看護研究ゼミナール	・ヘルスプロジェクト(疾患を抱えていても自分らしく働き続ける方法を提案します)
5 年次 (専 2)	・ライフステージからみた生命倫理に関する授業	・ICTを活用した授業 ・学年に応じた技術の統合実践	・看護研究方法 ・看護研究ゼミナール	・キャリアプロジェクト
育てたい力	・社会への参画力 ・事態への対応力 ・礼節 ・共有する力	・情報活用能力 ・学年に応じた看護技術力・知識力 ・臨地のイメージ力	・論理的思考 ・科学的視点 ・文献検索力 ・クリティカルシンキング	・イメージする力 ・課題発見力 ・課題解決力 ・コミュニケーション力

<ul style="list-style-type: none"> ・時代の事象を見る力 ・情報の取捨選択力 ・自己決定力 ・状況判断力 			・プレゼンテーション力
---	--	--	-------------

○教育課程上の特例（該当ある場合のみ）

特になし

○平成 28 年度の教育課程の内容（平成 2 8 年度教育課程表を含めること）

別紙参照

○具体的な研究事項・活動内容

1. 評価について

今年度は、3 年目としてこれまでの実績をもとに、各取組をシラバスの中に位置づけ、それぞれの取組を定着させこれまでの教育活動を深化させることを目指した。各活動の評価については、従来通り鈴木敏恵氏による「プロジェクト学習で身につく力¹⁾」30 項目を参考にして「育てたい力（評価の視点）」をもとに評価を行ってきたが、生徒の成長とともに自分に自己評価が厳しくなり数値のみでの客観的な評価が難しいことが見えてきた。そこで、生徒の自己評価と教員の客観的な評価の差をなくし、SPHの取組全体による生徒の変化を評価する指標として、生涯学び続ける「看護専門職者」を目指す生徒が専攻科修了までに目標とする姿を、「臨地実習における行動」として具体的に示した「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を作成した。

2. 各取組について

「豊かな人間性」では、「夏休み地域活動体験」として、コミュニケーション力を養うこと、異年齢との交流を通して、礼節を学ぶことや、相手の立場に立って考える豊かな人間性を養うことを目指した。活動としては、ボランティア活動や、社会資源のリサーチなど地域における活動を行っている。また、専攻科で先行的に実施した「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」では、各領域で行われている生命倫理に関する授業の進め方を統一した。授業のスタイルを倫理的ジレンマを感じる様な事例を提示し、一人一人が考える時間を持った後に、グループで意見交換を行うという共通の形にした。

「確かな知識・技術」では、外部講師による特別講義、ICTを活用した授業や協調学習、シミュレーションの手法を用いたアクティブラーニングによる授業が多く行われ、生徒が積極的に授業に参加し、意見交換する様子がみられるようになった。また、教材として、看護技術に関する本校独自の映像を作成し、タブレットやスマートフォンでの視聴を可能にし、生徒の主体的な学習に活用した。新たな取り組みとして、「看護技術の到達度」を開発した。看護実践で行うことが多い「寝衣交換」「シーツ交換」「移乗」の技術をピックアップし、5 年間の技術の習得を可視化できる様、段階的に到達度を明確に図にした。

多重課題に対応するための技術を身につける。診療の補助の技術を身につける	専攻科 2 年
臨床をイメージし、状況に応じた方法で日常生活援助を行うことができる。	専攻科 1 年
状況設定をして、患者の同意を得た上で、安全安楽を保ち同意を得ながら日常生活援助ができる	看護科 3 年
患者の環境を整え、安全を守る技術の基礎を身につける	看護科 2 年
技術の原理原則を理解できた上で実施できる	看護科 1 年

これにより、生徒が主体的に技術の習得へ向けた自分の成長過程や臨地実習の対象をイメージし、自己練習に積極的に取り組むことを期待している。それぞれの評価の項目を具体的に示したものを評価表として用いて、2 月、3 月に各学年で行われている技術テストや技術コンテストの実施、統合実技演習の場面で活用していく。

「科学的な思考・判断力」では、高校 1 年生から科学的根拠について、実験や計測を通して確かめたり、得られたデータから考えてみる経験をさせる授業を行った。また、連携している大学の施設・設備・実験機器を用いた、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座もシラバスに組み込まれ定着した。

高校 2 年生から論文に触れる機会を作り、クリティークの視点を養っているが、専攻科では、今年度は「クリティーク」ルーブリックを作成し、生徒が客観的にその成長を感じられる指標を示した。

また、学年全員を対象とした学習以外に、希望者を募って始動した『看護研究ゼミナール』のメンバー 12 名が、高校 2 年生で実施したナーシングアートプロジェクトを発展させ、夏季休業中に血糖変動プレ実験を行うなど、自主的活動を通して研究方法を学んでいる。

本校では、「生涯学び続ける力」を育成するために「プロジェクト学習」を取入れている。今年度は、

昨年までの成果をもとにその実施時期や、ポートフォリオの活用などそれぞれの取組が5年間を見通したものになる様に精選した。また、今年度のプロジェクト学習では、特に対象の「イメージ化」に力を入れ取組んだ。高校1年生の「基礎看護」では単元とプロジェクトの対象のイメージ作りに関連を持たせ生活や日常生活援助の学びによりリアルな「対象者」を取り入れた学習を行い、課題解決力を身に付けるための基礎作りの工夫を行った。高校3年生は、看護師としての将来を見すえた意識付けができる様、キャリアポートフォリオを作成した。

5 研究の成果と課題

○実施による効果とその評価

1. SPH活動評価法の開発

「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」の作成

SPHで身につく力		5	4	3	2	1
豊かな人間性	他者を尊重する	37.8	51.2	9.8	0.0	1.2
	協調性	23.2	51.2	23.2	2.4	0.0
	自己理解、折れない心、高い志	34.1	45.1	18.3	1.2	1.2
	感性が豊か、協調性	28.0	54.9	15.9	1.2	0.0
確かな知識・技術	社会人の基本スキル	24.4	51.2	20.7	1.2	2.4
	(修正前)	25.9	65.4	8.6	0.0	0.0
	イメージ力 (修正後)	54.9	37.8	6.1	0.0	1.2
	知識の定着	9.8	48.8	37.8	3.7	0.0
	技術の定着	39.0	54.9	6.1	0.0	0.0
科学的思考判断	対象の理解	42.7	45.1	9.8	2.4	0.0
	情報活用能力	17.1	63.4	14.6	4.9	0.0
	論理的思考 (的確な判断)	17.1	62.2	19.5	1.2	0.0
	論理的思考 (適切な表現)	18.3	64.6	14.6	2.4	0.0
	科学的視点	26.8	51.2	15.9	6.1	0.0
生涯学び続ける力	文献検索力	19.5	56.1	20.7	3.7	0.0
	クリティカルシンキング	26.8	43.9	24.4	4.9	0.0
	イメージする力	34.1	48.8	11.0	2.4	3.7
	課題発見力	25.6	57.3	12.2	4.9	0.0
	(修正前)	11.1	72.8	16.0	0.0	0.0
課題解決力 (修正後)	25.6	62.2	7.3	3.7	1.2	
コミュニケーション力	30.5	53.7	13.4	2.4	0.0	
プレゼンテーション力	12.2	45.1	37.8	4.9	0.0	

SPH活動において、本校の育成すべき看護専門職者に必要な力として、「豊かな人間性」、「確かな知識・技術」、「科学的思考判断力」、それらを統合する「生涯学び続ける力」が求められるとの仮説を立て、様々な取組を行ってきた。今年度は、SPH3年目の活動として、SPH活動評価法の開発に取り組んだ。生涯学び続ける「看護専門職者」を目指す生徒が専攻科修了までに目標とする姿を、「臨地実習における行動」として具体的に示した「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を作成した。項目は20からなり、生徒が自己の成長や行動変容を臨地実習における到達度として、客観的に適切に評価できるようにするため、5段階評価とした。そして、各段階の評価基準を臨地実習での場面を想定した具体的な観点で示した。高校3年生終了時に5段階中の「3」、専攻科2年生終了時に「5」を目指すものとし、各学年の実習終了時の姿を比較しその変容を評価することとした。ルーブリックの項目は、上記の「育てたい力」と、昨年度の職員研修の結果からまとめられた「常盤高校が考える豊かな人間性」をもとに、「社会人基礎力²⁾」を参考にし独自指標として作成した。

<評価>

妥当性を検証するため、臨地実習をすべて終了した現専攻科2年生に実施し、その結果をもとに到達度や表現を修正した。今後は、高校3年生の実習終了後に

実施するが、評価は、生徒の自己評価と引率教員による他者評価で行い、その後に生徒と引率教員が面談をし、実習における自己の行動を客観的に振り返るとともに、身についた力の確認や今後の課題について確認していく。

生徒はSPHによる活動一つ一つを積み重ね「生涯学び続ける力」を身につけていく。このルーブリックを作成したことで、本校が求める看護専門職者として必要な力を具現化でき、SPH活動でどのような力を身につけてほしいのかという「教員の願い」を共有することができた。ルーブリックのそれぞれの項目は、SPH活動における「育てたい力」と連動しており、活動の目標を臨地実習での行動で明示したことは3年間の取組の集大成であり、今後、5年間の生徒の変容を評価するための指標ができたと考えている。

2. シラバスに取入れたSPH活動

3年目の今年度は、これまで行ってきた様々な取組の中から、学習効果の高い活動について、授業時

間内で継続的な教育活動を実施できるようシラバスに明記した。

	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力	
高校 1年	「地域活動体験」夏休みの課題として実施	基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業 シミュレーション学習、協調学習 実技コンテスト	基礎看護 大学連携講座(県立大学) 実験的な取組	基礎看護 防災プロジェクト ナインゲールプロジェクト
		基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業 シミュレーション学習、協調学習 実技コンテスト	基礎看護 卒業 情報活用	基礎看護 プロジェクト学習(NAP) 大学連携講座(女子栄養大) 初歩的な統計処理
		基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業 シミュレーション学習 実技テスト	基礎看護 薬理	看護研究講座 大学連携講座(日本薬科大)
成人看護		専門家による特別講座 (放射線、感染管理) 専門家による特別講座 (フィジカルアセスメント、災害看護) 専門家による特別講座 (放射線、がん看護)			
統合		実技テスト	統合	看護研究	ヘルスプロモーション ヘルスプロジェクト
専攻科 1年		各領域 倫理に関する 授業 看護観を育てる 授業	ICT活用、シミュレーションなどによるアクティブラーニングを実践中		
専攻科 2年	各領域 倫理に関する 授業		看護研究 看護研究		

<評価>

平成 27 年度末に S P H による活動をシラバスに取入れ、平成 28 年度はそれにもとづき活動を行ってきた、これまでの評価よりシラバスに取入れた活動は今後も継続可能であることが確認されており、次年度以降は評価の対象を専攻科部分に移行していくものとする。シラバスに定着したそれぞれの活動により身についた力は様々な場面で活用されているが、今後の成長については「S P H で身につく力～実習ループリック～」で総合的に評価するものとする。

3. 主な取組について

(1) 「科学的思考・判断力」を育てる取組～「クリティークする力」のループリック評価～

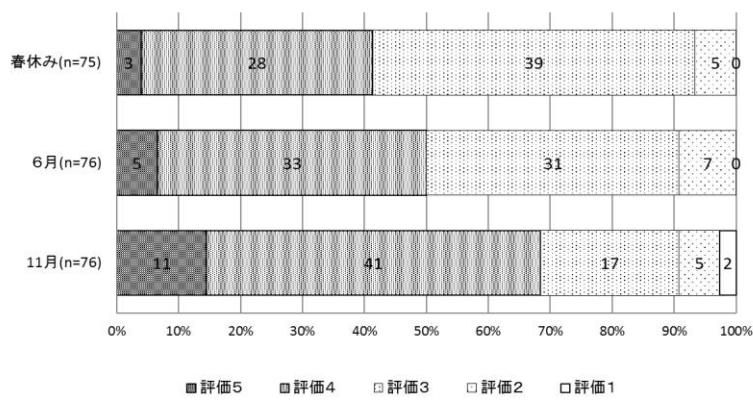
「科学的思考・判断力」では、実験的要素を含んだ授業を展開し、文献検索の方法や、基礎的なデータ処理、初歩的な看護研究の指導を行い、論文を読むことで研究的な視点や態度の育成を図ってきた。今年度は、「クリティークする力」を客観的に評価するために、27 年度の報告書で示した「教員による客観的評価」を改変してループリック評価表を試作した。

	評価5	評価4	評価3	評価2	評価1
クリティークする力	論文を精読して理解し、クリティカルに論文の価値を判断しており、具体的に指摘しながら、論理的・多角的に自分の意見や考えが述べられている	クリティークの視点で論文を読み、研究プロセスの妥当性や価値について、ある程度具体的に自分の意見や考えが述べられている	クリティークの視点に沿って考え、評価しているが、具体的に自分の意見や考えを述べるには至らない	クリティークの視点を意識した記述になっていない	提出の遅れ

<評価・考察>

トライアル学年は高校 2 年からこれまで、5 回クリティーク課題を与えてきたが、①高校から専攻科に進級する春休み、②専攻科 1 年 6 月、③専攻科 1 年 11 月の 3 回について、提出されたクリティークシートを評価材料として、試作したループリック評価表を用いて評価した。春休み明けと比較すると、評価 3 の人数割合は減少傾向にあり、評価 4、評価 5 の割合は増加してきている。

専1「クリティークする力」評価



専攻科1年11月では、評価4は、41名(54%) 評価5は11名(14%)であり、評価4、5は合わせて68%を占め、これは当初目標としていた30%を上回る結果であった。評価5は、容易に到達するレベルではないが、クリティカルに論文を読んで、論理的に自分の意見や考えをまとめる力は、確実に育ってきていると評価できる。

また、今年度は、従来から専攻科1年生で取り組ませてきた「ケース・スタディ」についても、ルーブリック評価できるように検討を重ねており、1月末提出期

限の論文を評価する予定である。研究成果物としてのケース・スタディの評価を生徒自身も可視化できる評価表の作成をめざしている。

(2)「生涯学び続ける力」を育てる取組

「生涯学び続ける力」を育てる取組では、プロジェクト学習を導入し3年が経過した。高校1年生では、「防災プロジェクト(チーム)」と「健康プロジェクト(個人)」、高校2年生で「エビデンス探求プロジェクト(チーム)」、高校3年生では、「キャリアプロジェクト」をシラバスに取入れ、シラバスに定着した。本年度はさらに、専攻科1年生の科目「ヘルスプロモーション」において、「ヘルスプロジェクト」を導入し、専攻科1年生までが、毎年同じテーマのプロジェクト学習に取り組むシラバスが完成した。テーマとの関連で看護教科を主に、「家庭科」「地歴・公民科」など関係する教科とも連携し、指導内容・時間・指導教員を確保した。また、今年度のプロジェクト学習は、対象の「イメージ化」に力を入れた。防災プロジェクトでは「基礎看護」の単元「看護の意義」「看護の対象の理解」「日常生活の理解」の授業内容とプロジェクトの対象のイメージ作りに関連を持たせ、よりリアルな「対象者」を取り入れた学習を行い、課題解決力を身に付けるための基礎作りの工夫を行った。

プロジェクト学習では、その成果を大勢の人の前でプレゼンテーションすることが求められる。本校実習先である病院関係者や教育関係者、保護者、卒業生に広く呼びかけ公開プレゼンテーションを行った。今年も、高校1年生と専攻科1年生の合同プレゼンテーションを行い、その運営を高校3年生が行った。実施後の感想からターゲット学年である3年生は、高校1年生を見て自分の成長を感じ、専攻科1年生を見て進級後のイメージ作りができたようである。参加した生徒全学年の感想をみると異学年での発表という機会を通して上級生が自身の成長を強く感じ、いままでの努力に対する自己肯定感を高めていることや、下級生が、上級生の思考や解決力にあこがれを持つことがわかった。

また、外部からの参加者には、公開プレゼンテーションの場で、生徒に向けて感想を伝えていただいた。「質疑応答が活発で、学年を超えて学びあえている。質問や返答が活発な討議になっており、発表の場においても思考がフル回転している。チームとして円滑な発表ができています。情報を集め、思考し、発表する一連の流れが定着している。」等、学びの成果に対して、外部の方から高い評価をいただいた。達成感・自己肯定感が高められた様子が、終了後の生徒感想文から伝わった。

<評価・考察>

高校1年生と専攻科1年生のプロジェクト学習を通して身についた力の自由記述アンケートから、取組の中で育てたい力としていた、イメージする力、課題発見力、課題解決力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力について記載されているものを抽出し分類した。高校1年生の記述内容は、「育てたい力」の5つのキーワードをそのまま使った記述が多いのに比べて、専攻科1年生では、具体的な要素の情報スキルに関連した記述が増え、課題解決へ向けた一連の思考過程として、「課題発見と解決」のための具体的なプロセスが思い描けていると考える。情報スキルは「確かな知識・技術」の情報活用能力や「科学的思考・判断力」の情報を見極める力が身につけている事、また、他者に配慮し、伝えることを意識したコミュニケーション力、プレゼンテーション力は人間性が豊かになっている事を表しているといえる。課題解決へ向けた一連の思考過程を通して「生涯学び続ける力」が身につけてきている

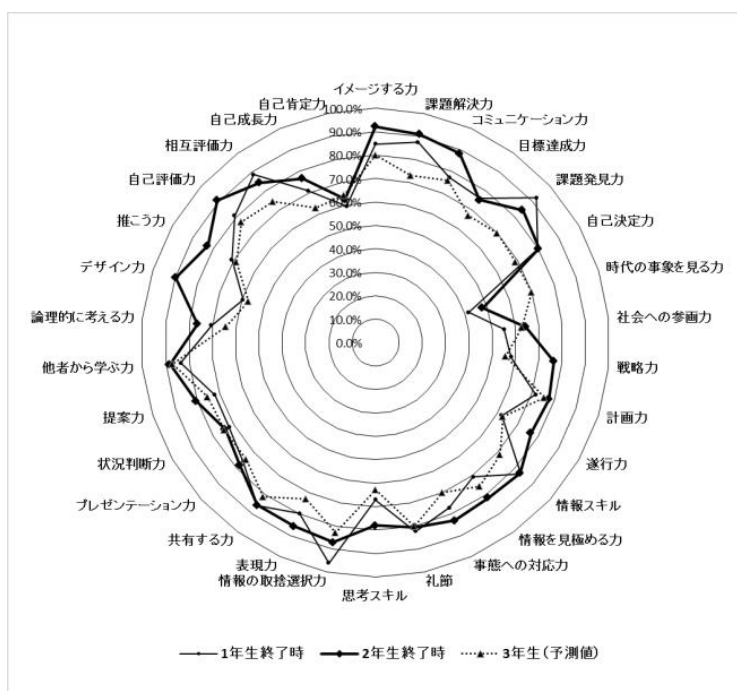
と考えられる。

高校1年生		専攻科1年生	
イメージする力(24)	イメージする力		限られたもの(時間など)の中で、効果的に行う作業イメージ(6)
計画する力(4)	(72)	(29)	計画する力(2)
この先どのように行動するのか考える力(3)			「その人個人」をイメージして考えられることの範囲が広がった(1)
課題を発見する力(12)	情報スキル	課題発見力	情報収集・情報の選別など(16)
状況を判断し課題を発見する力(2)		(30)	(2)
課題を発見することが多くなった(2)			わからないこと、疑問な点を複数の文献を用いて調べること(2)
課題を解決する力(13)	課題解決力		その人に合った対策の提案の視点、個別性に合わせた考え(8)
根拠を持って調べることができた(1)	(36)	(9)	根拠を基に考える力(7)
課題を発見し解決できるようになった(3)	(6)	(49)	具体的な提案(1)
コミュニケーション力(19)	コミュニケーション力		質問に対する対応力(8)
考えを言葉にする力(3)	(36)	(58)	相談する力(2)
他者との意見交換・共有する力(4)			発表を聞きながら、同時に考え、アドバイスする(1)
プレゼンテーション力(20)	プレゼンテーション力		まとめる力(22)
相手に分かりやすく伝える力(4)	(39)	(72)	どうしたら相手に伝わりやすいか考える力(8)
人前で話す力(8)			相手に納得してもらえるような説明方法を考える力(2)

4. SPHによる活動の評価

(1)「育てたい力」の経年変化

各学年の終了時に30項目からなる「育てたい力(評価の視点)」アンケートを実施している。「それぞれの力が身についたと思うか」という問いに対し、4段階で回答を得ている。図6は、SPH指定時の入学生が「身についた」と感じている割合の経年変化をみたものである。全体を見ると、1年生の時よりも2年生の円が大きくなっており、2年次の方が力が「身についた」と感じている生徒の割合が多いことがわかる。この結果は、先行学年でも過去2年間同様の動きをしている。高校3年生(予測値)では、円が小さくなっていることから、高校1年生に比べ高校2年生は自分の成長を実感できているが、高校3年生は、専攻科への進級前ということもあり、より客観的に自分を振り返った結果、自己評価が厳しくなっていると考えられる。



また、SPHにより、自分で考え思考を深めることを求める専門的な取組を早期に行うため、与えられる課題の難易度が上がっていることも、影響しているのではないだろうか。しかし、教員の手応えとして生徒たちは自分のビジョンや「ありたい像」を自分の言葉で表現し、目標を設定した上で、主体的に取り組むことができるようになったと感じている。これらを定性的に評価する方法として、ルーブリックを作成した。

○実施上の問題点と今後の課題

4年目は、専攻科での「看護観を育てる」授業方の開発、「学年に応じた看護技術の到達度」による評価、研究の基礎力の向上を主な取組とし、シラバスに取入れた活動や各学年におけるプロジェクト学習を継続して実施していく。教員研修の充実も図っていく。

今後の課題として、指定年度の入学生が専攻科に進級していくにあたり、時間の制約があることが予測される、より効果的な活動を精選し、限られた時間の中で実施していく必要がある。

<参考文献>

- 1) 鈴木敏恵：21世紀を生きる力が身につく！総合的な学習・プロジェクト学習ポートフォリオシート集、教育同人社
- 2) 箕浦とき子・高橋 恵編：看護職としての社会人基礎力の育て方、日本看護協会出版、2012